

Title	A Study on Metaphorical Evaluation in Written Texts from a Perspective of Cognitive Linguistics
Author(s)	歳岡, 冴香
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26224
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

[題 名] A Study on Metaphorical Evaluation in Written Texts from a
 Perspective of Cognitive Linguistics
 (書き言葉における比喩的評価についての認知言語学的研究)

学位申請者 歳岡 冨香 印

Hunston and Tompson (2000) の述べるように、書き手(話し手)の肯定的・否定的な感情、判断、評価を表わす表現は、テキストの意味を考える上で考慮すべき言語の重要な特徴の一つであるが、それは必ずしも直接的に記述されるところとは限らない。比喩的な言語表現は書き手の対象に対する判断や感情を、表現から喚起することで間接的に読み手に伝える表現のひとつである(Martin and White, 2005)。本論文では、Hunston and Tompson (2000) にならい、ある対象に対する書き手の態度や視点、感情の表明を「評価」(evaluation)と呼び、比喩により評価を表わすことを「比喩的評価」(metaphorical evaluation)と呼ぶ。¹ 本論文では3つの事例研究を行い認知言語学の観点から書き言葉にみられる比喩的評価について論じる。また、第六章では、村上春樹によるエルサレム賞受賞スピーチにおけるメタファー翻訳を分析し、比喩的評価についての認知言語学的観点からの研究が、翻訳プロセスに介入する翻訳者主体に焦点をおく近年の翻訳研究(Baker, 2006; Hermans, 2007; Munday, 2009)にも貢献することができる可能性を示す。

第1章2.1と2.2では認知言語学におけるメタファーとメトニミーについて述べる。Lakoff and Johnson (1980) はメタファーの本質とは、あるものを別のものによって理解することであるととし、Lakoff (1987) は、メタファーを起点領域と目標領域の概念領域間の写像であると説明する。メタファーは、メタフォリカルな言葉遣いとして言語表現上に顕れる。前者を概念メタファー(conceptual metaphor)と呼び、後者のメタファー表現(linguistic metaphor)とは区別する(Lakoff and Turner, 1989)。目標領域Aと起点領域Bから成る概念メタファーは、A IS B と表記する(ibid.)。本論文では、Cameron (1999)、Steen (1999)にならい、概念領域間写像を具現化する言語表現は、すべてメタファー表現と考える。一方、メトニミーの主要な働きは指し示すことであるが、Gibbs (1999)の述べるようにこれも慣習的な言語表現の多くにみられる。また、ある概念領域のイメージを、別の概念領域に写像するメタファーは、特にイメージメタファーと呼ばれる(Lakoff and Turner, 1989)。

第2章2.3では、比喩的評価についての先行研究を論じる。Martin and White (2005) は、Appraisalの研究のなかで、比喩表現が評価の記述に関わると述べる²。Appraisalはattitude, graduation, engagementの3つから成り、Martin and White (2005) は特にspeakerの肯定的/否定的な感情を指すattitudeを表わす言語表現に、比喩表現も含まれると述べる。しかし、彼らの研究は、その際の仕組みを明らかにするものではない。鍋島(2011)は、認知言語学の観点から、肯定的/否定的な書き手の主観的評価を表現する慣習的なメタファー表現を分析し、「毒」「泥」「罨」などのように「評価性」の伴う語がメタファー表現を形成しやすいことから、「評価性」がメタファーの重要な基盤となると指摘する³。しかし、同じマイナスの評価性を伝えるとしても、「泥」と「罨」とでは使われる文脈が異なる。個々のメタファー表現が喚起する評価を正確に捉えるためには、その使用文脈の違いも考慮する必要がある。この点で、野澤・渋谷(2007)の発話行為的メタファーの研究も比喩的評価の研究に関わる。このメタファーは、字義的表現を持つ概念がコミュニケーションの特定の文脈においてメタファー表現によって表わされたものであり、起点領域の概念についての百科事典的知識や情動は、その文脈においてコミュニケーション上の効果を持つ。このような百科事典的知識や情動もメタ

¹ Hunston and Tompson (2000) によるevaluationの定義は以下のとおりである。‘the broad cover term for the expression of the speaker or writer’s attitude or stance towards, view point on, or feelings about the entities or propositions that he or she is talking about’ (2000: 2)

² Appraisalの説明は以下の通りである ‘the global potential of the language for making evaluative meanings, eg for activating positive/negative viewpoints, graduating force/focus, negotiating intersubjective stance’ (Martin and White, 2005: 164)

³ 鍋島(2011)は「価値(value)」「判断(judgement)」「評価(evaluation)」などと呼ばれるものを「評価性」と呼ぶ(293)

ファーの伝える評価の一部として考える必要がある。

第3章では、本論文での主要な分析手法である4つの比喩的評価のメカニズムを確認する。これはDeignan(2010)において説明されたものであり、①メタファーが含意(entailment)をもつストーリーを生成すること、②ひとつのメタファーが複数のシナリオ(scenario)を生成すること⁴、③メタファー写像の際に、起点領域の評価的含意が目標領域でも保たれることが多いこと、つまり字義通りの言葉に備わった否定的・肯定的含意は、それが比喩的に使われた場合にも保たれていることが多いこと、④書き手が意図的に特定の起点領域を選択すること、の4つである。なお、Dignan(2010)はこれらのメカニズムは競合しないと述べるが、2つ以上のメカニズムが同時に働く仕組みや効果については詳細な議論はされていない。

第4章では、概念メタファーPEOPLE ARE ANIMALSを具現化する直喩表現‘people verb like animal’の表わす評価について論じる。ANIMAL は人(その行動・感情・性質)を目標領域とするメタファーの起点領域である(Lakoff, 1987; Lakoff and Turner, 1989; Kovecses, 2002)。概念メタファー PEOPLE ARE ANIMALS には、目標領域PEOPLEに対する蔑視が伴うと論じられてきたが、Kovecses(2002)は、異なる種類の動物が起点領域となる場合には、評価は否定的なものに限らないことを示唆している。またDeignan (2005) は‘people verb like animals’ という直喩表現は個々の動物を起点領域とするメタファーを具現化するが、これの伝える評価は、蔑視に限らずより多様な可能性があるとは指摘する。

British National Corpus (BNC) の書き言葉セクションから‘ people verb like animal’を含む用例を集め分析した。まずPEOPLE IS AN INDIVIDUAL ANIMAL という概念メタファーの起点領域となりやすい動物は、DOG, CAT, RABBIT, HORSE, BULL, HEN, CHICKEN であることがわかった。次に、主にこれらの動物を起点領域と結びつきやすい目標領域と、そのメタファーが生成するシナリオ、それにより伝達される評価の特徴を調査した。その結果、起点領域の動物の違いは伝達される評価の違いとなることがわかった。たとえば ANGRY MEN を目標領域とする場合であっても、HORSE を起点領域とする場合には、喩えられた人物の激しい怒りはなだめられるべきものとして描かれるが、BULL を起点領域とする場合には、喩えられた人物の怒りの行動の暴力性に焦点があたる。また同じ起点領域の動物であっても目標領域が MEN か WOMEN により呼び起こされるシナリオが異なり、したがって伝えられる評価も異なることがわかった。各動物を起点領域とするメタファーの生成する特徴的なシナリオは以下の図の通りである。

source domain	target domain	Scenarios
DOG	MEN	a dog on heat a pet dog an angry dog a mad dog
CAT	MEN	a cat hunting for a mouse an angry cat
	WOMEN	an angry cat a fighting wild cat a relaxed cat
RABBIT	MEN/WOMEN	a hunted rabbit
HORSE	MEN/WOMEN	a horse feeding on its food a startled horse
BULL	MEN	an angry bull
HEN	WOMEN	a clucking hen
CHICKEN	PEOPLE	chickens as live stock

第5章では、音楽レビュー記事で使われた「共感覚メタファー」に伴う評価とその仕組みについて論じる。このメタファーは、ある感覚領域に属する表現が他の感覚領域を描写するために比喩的に転用されるという慣習的な現象を指す。日英語ともに、感覚表現は、ある感覚から別の感覚を描写するために転用される傾向がある (Ullman, 1957; Williams, 1976;山梨,1988)。英語では聴覚と視覚を記述するために他の感覚から表現が転用される傾向があるが、こ

⁴ ScenarioのMusolff(2006)による定義は以下の通り。A set of assumptions made by competent members of a discourse community about ‘typical’ aspects of a source situation, for example, its participants and their roles, the ‘dynamic’ story lines and outcomes, and conventional evaluations of whether they count as successful or unsuccessful, normal or abnormal,

れは日本語でも同様である(山梨:1988)。感覚を記述する表現は対象に対する主観的な見方を表わすため、それらが比喩的に用いられた場合も、評価を表わしやすくと予測される。実際に、感覚表現の他の領域への意味拡張では、起点となる感覚の特徴(ポジティブ性・ネガティブ性、客観的・主観的視点の違い)などが写像されると指摘されている(進藤・内元・井佐原,2007)。共感覚メタファーに加え、音楽レビュー記事に使われるメタファーとしては、概念メタファーとイメージメタファーがあると考えられる。

英語表現をNew York Times、Guardian、British National Corpusから、日本語表現を朝日新聞から集め分析した結果、共感覚メタファーが評価を表わすとき、それらの表現は何らかの概念メタファーに動機付けられていることが多いことがわかった。音楽レビュー記事にみられたメタファーには、BEAUTY IS BRIGHTNESS, HAPPINESS IS WARMTH INTENSITY IS HEAT、MUSIC IS FOOD、MUSIC IS TEXTILE、MUSIC IS A CRAFTWORKがある。2つのメタファーが相容れない効果を持つ場合もあり、たとえばBEAUTY IS BRIGHTNESSの働きにより、一般的に、「明るさ」(brightness)を記述する言語表現は、書き手の肯定的な評価を伝えるために使われるが、音楽という特定の文脈においては「明るさ」を記述する言語表現が、音楽に対する否定的な評価を表わすためにも使われることがある。これは、音楽に特定のメタファーであるMUSIC IS A CRAFTWORKの働きである。

第6章では、村上春樹によるエルサレム賞スピーチのメタファーとその翻訳を分析する。村上のスピーチは、村上の日本語原稿をJ.Rubinが英語に翻訳、それに基づいて村上が2009年2月15日にJerusalem International Book Fairにて英語で行なったスピーチを、共同通信社の細川洋嗣記者が日本語に翻訳し、ニュースサイト47News上で発表したものだ。村上が日本語原稿で用いたメタファー表現は、3つに分けられる。まず村上は非慣習的なメタファー表現を、3つの概念メタファーAN INDIVIDUAL SUPPRESSED BY 'THE SYSTEM' IS AN EGG BREAKING AGAINST A WALL、NOVELISTS ARE HUNTERS、NOVELISTS ARE GUARDSを紹介し彼の考えを聴衆に伝えるために使う。特にAN INDIVIDUAL SUPPRESSED BY 'THE SYSTEM' IS AN EGG BREAKING AGAINST A WALLは、イスラエルのガザ地区攻撃に対する村上の批判的な評価を伝えるものだ。一方、村上は比較的慣習的なメタファー表現を論点の強調と彼の考えの簡潔な伝達のために使う。

次に、Rubinと細川による村上スピーチの翻訳を、翻訳者の意図(intention)に注目して分析した。Rubinの意図はRiccardi(2002)の述べる通訳者のそれに類似しており、これは3つの概念メタファーを保持し、比較的慣習的なメタファー表現は省略或いは意識する彼のメタファー表現の翻訳の特徴に現れている。一方、細川はNOVELISTS ARE HUNTERS とNOVELISTS ARE GUARDSの二つの概念メタファーを具現化するメタファー表現を意識し、AN INDIVIDUAL SUPPRESSED BY 'THE SYSTEM' IS AN EGG BREAKING AGAINST A WALLを具現化するメタファー表現のみを保持している。さらに、細川はこのメタファーの表わす空爆への批判的評価を「前書き」のなかで読者に対し明示的に説明することで、村上スピーチの中心的なメッセージに対する読者の解釈に影響を与えているようだ。細川の意図はBielsa & Bassnet (2009)の述べるニュース翻訳者のそれに類似している。

第7章では、3つの事例研究個々の結果をまとめるとともに、今後の研究のための指針として、次の2点を述べた。1) 本論文は、Deignan(2010)で説明された4つのメカニズムの複数が同時に働く場合の仕組みと効果を示唆しているが、今後は、より多彩な文脈におけるメタファー表現を分析することで、より詳細に比喩的評価のプロセスを考察する必要がある。2) 本論文でのメタファー翻訳分析で扱ったのはスピーチという特定のタイプの文章であり、今後は異なるタイプの文章におけるメタファー翻訳を広く分析することで、比喩的評価についての認知言語学的観点からの研究が、翻訳研究に広く貢献できる可能性を広く検証する必要がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (歳 岡 冨 香)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	木村 茂雄
	副 査	教 授	杉本 孝司
	副 査	准教授	大森 文子
論文審査の結果の要旨			
<p>本論文は、書き言葉を中心に、比喩的な言語表現を、対象に対する書き手の肯定的・否定的な感情や判断を間接的に読み手に伝える表現のひとつと捉え、対象に対する書き手の態度、視点、感情の表明を「評価」(evaluation)と呼び、3つの事例研究により、認知言語学の観点から書き言葉に見られる比喩的評価 (metaphorical evaluation) について論じたものである。</p> <p>第1章では本論文の目的と構成を示し、第2章では認知言語学におけるメタファー、比喩的評価についての先行研究を概観する。第3章は本論文の着眼と方法論について述べている。第4章から第6章は事例研究である。</p> <p>第4章では、人間を動物で喩える英語の直喩表現の用例を、British National Corpus (BNC) の書き言葉セクションから収集し分析している。人間を比喩的に評価するために用いられる動物の中から、頻度の高いものを7種類特定し、個別用例について、表現が喚起するシナリオと、それにより伝達される評価の特徴を調査し、動物の違いは伝達される評価の違いとなること、また同じ動物でも、それが男性に対する喩えなのか、女性に対する喩えなのかにより、呼び起こされるシナリオが異なり、伝えられる評価も異なることを論じている。</p> <p>第5章では、New York Times、Guardian、BNC、朝日新聞に掲載された音楽レビュー記事で用いられた、英語と日本語の共感覚メタファー、すなわち、ある感覚領域に属する表現が他の感覚領域を描写するために比喩的に転用される現象を扱い、共感覚メタファーが評価を表すとき、それらの表現は何らかの概念メタファーに動機づけられている場合が多いことを明らかにしている。</p> <p>第6章では、村上春樹によるエルサレム賞スピーチのメタファーとその翻訳を取り上げる。村上が用いた概念メタファーを3つ挙げ、村上の日本語原稿の英訳、英語スピーチの日本語訳について、翻訳者の意図に注目して分析している。</p> <p>第7章では、3つの事例研究のまとめと今後の課題を述べている。</p> <p>本論文は、学術用語の扱い方、議論の展開、データ収集方法や用例観察にやや精密さに欠ける部分もあり、比喩的評価の認知メカニズムに関する十全な考察にまではいたっていないという指摘もなされた。しかし、動物比喩、共感覚比喩、スピーチにおける政治的比喩など、多様な比喩表現に目を向けていること、また、電子化コーパス、日英の新聞記事、スピーチ原稿など、多様なデータ源から用例を集め、個々の用例にみられる豊かで巧みな表現法や文体的効果を仔細に分析していること、原文と翻訳文における比喩表現の異同に着目していることなどが、本論文の特色として評価された。時間をかけて観察と分析を試みた労作であり、ここに示された視野を広げ、考察を深化させることにより、さらなる発展が期待できる研究である。</p> <p>以上により、本論文を博士 (言語文化学) の学位論文として価値あるものと認める。</p>			